

## 楽園を失う

### [聖書]創世記3章20～24節

アダムは女をエバ(命)と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた。

主なる神は言われた。「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。

### [序]エデンの園・楽園

私たちは聖書教育のカリキュラムに従って、7月から聖書の第1頁、「初めに神は天地を創造された」という言葉で始まる**創世記**を読み始めました。**2章4節 a**までの天地創造の記述は、**紀元前6世紀**のバビロン捕囚時代に記述された文書ですが、**2章4節 b**以下は、**紀元前9世紀頃**に書かれた素朴な記述の創造物語が用いられています。今日の聖書の箇所は、その素朴な天地創造物語のいわば締めくくりの部分です。

主なる神は、先ず土(アダマ)の塵(ちり)で人(アダム)を形づくり、その鼻に**命の息**を吹き入れて、人間をお造りになりました。そして**エデンの園**に住ませました。エデンの園には、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらす**あらゆる木**が生えており、園を潤す川の流域からは、**金**や**宝石**も豊かに産出しています。人の**任務**は、このエデンの園に住み、**耕し**、**守る**ことでした。

神は、人にお命じになりました。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、**善悪の知識の木**からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」。その善悪の知識の木は、命の木と共に、エデンの**園の中央**に据えられていました。

次に、神は言われました。「人が独りであるのは良くない。彼に合う**助ける者**を造ろう」。そこで神は、野のあらゆる**獣**、空のあらゆる**鳥**を土で形づくり、人のところへ持って来られました。人はあらゆる家畜、鳥、獣に名を付けて、会話を交わそうとしましたが、人格的な交わりを結ぶに至りませんでした。自分に合う**助ける者**は見つからなかったのです。

そこで神は、人を深く眠らせ、**彼のあばら骨の一部**を抜き取って**女**を造り上げ、彼のところへ連れて来られました。すると人は喜びの声を上げました。「ついに、これこそわたしの**骨の骨**、わたしの**肉の肉**。これをこそ、**女(イシャ)**と呼ぼう。まさに、**男(イシュ)**から取られたものだから。」

骨と肉、即ち**骨肉**とは、**家族・身内**の者を指す言葉ですね。こうして人は、身も心も一つになって、共に生きていく**相手(女)**を、家族として与えられたのでした。人と妻は二人とも**裸**でしたが、恥ずか

しがりはしませんでした。即ちこの二人は、**ありのままの自分を**少しも恥ずかしいとは思わず、**素直に出し合い、受け容れ合って**、一緒に毎日を送っていたのです。

美味しい**食べ物**を毎日食べられる。**お金**や財産もたっぷりある安心感。しかも互いに信頼し、共に生きていく**交わり**があり、さらに自分の力に応じて働く有意義な**仕事**も与えられている——何という幸せな人生でしょうか。主なる神が与えて下さった**エデンの園**は、まさに申し分のない**楽園**でした。

## [1] 楽園の中心的ルール

ところが人(アダム)と妻(エバ)は、この**楽園**を失ってしまいました。どうして?? それは、「決して食べてはいけない。食べると必ず死んでしまう」と神から命じられていた**善悪の知識の木の実**を、蛇の誘惑にそそのかされて**食べてしまった**からです。

では神はどうして、食べたら必ず死んでしまうような**恐ろしい木**を、命の木と共に、わざわざ**エデンの園の中央**に据えられたのでしょうか。その点について、先週丸山主事が説教されました。その原稿を、是非もう一度読み返してください。

「**交わりにはルール**がある。ルールを**無視**すると交わりは成り立たなくなる」と丸山主事は説明しています。人間は、神が土の塵から形造り、ご自分の命の息を吹き込んで、生きる者として下さった存在、即ち**神の被造物**です。それならば、大切な判断については、即ち何が善であり、何が悪であるかは、自分勝手には下さない。その判断は、自分を創造したお方、世界の創造者であり、このエデンの園の**創造者である神に聞き従うこと**、——これが神と人間との交わりを成り立たせる、一番大切な**ルール**です。しかしアダムとエバには、その自覚がなかったのです。

ではどうして楽園を追放されるほどの、**決定的に誤った行為**を、エバとアダムはしてしまったのでしょうか。蛇の誘惑の声は、「それを食べると、**神のように善悪を知る者**になるから」でした。そしてエバは「**賢くなりたい**」という思いに強く唆されたからだと記されています。でも賢くなりたいという思いは、とても大切なのではないのでしょうか。**賢くなれ、賢くなれ**——これは子供たちが、家庭でも学校でも、繰り返し教えられている**教育**です。

ところが社会では、リーダーになるような賢い人たちが、業績が悪くなったり、組織内部での間違った処理の仕方や不具合が生じると、隠したり、不正に処理して、自己保身をしてしまいます。そしてそれが暴露され、責任者が追及されるというスキャンダルが後を絶ちません。**組織や我が身を守る**ことが善であり、**不利になることは悪**だという行為が、至る所から噴き出てきています。つい先日防衛庁では、大臣、次官、幕僚長等の首脳が一挙に辞任に追い込まれました。人間の**賢さで善悪を勝手に決める**ことから、このような悪が生まれてくるのですね。

## [2] 楽園からの追放

さて、神の厳しい命令に違反して、善悪を自分で判断しようとする行為を始めたアダムとエバを前にして、神は、彼らの**次の行動**を予想されました。「人は**我々の一人**のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして**命の木**からも取って食べ、**永遠に生きる者**となるおそれがある。」

ここで神がご自分を「**我々**」と複数形で語っておられる点に、おやと疑問が起こりますね。これは、1章26節でも同じく「**我々**にかたどり、**我々**に似せて、人を造ろう」と複数形です。天地万物を創造された全地全能なる唯一の神を信じる聖書の信仰なのに、どうしてでしょうか。いろいろな説明がなされていますが、新約聖書になりますと、神は、**父・子・聖霊**として働かれる**三位一体の神**として語られます。ですから旧約聖書の時代でも、神の**豊かな働き**の故に神を**複数形**で語ってしまうことがあったのではないかと、私は解釈しています。

先を見て居られる神は、アダムとエバが、やがては**命の木の実も食べてしまう時**が来ると予想されました。そうしたら自分の思いで善悪を判断して行動する彼らが、何時までも**生き続ける**ことになります。これは決して良いことではありません。アダムとエバから生まれる子孫が増えていくにつれて、エデンの園のあちこちで、人々の間に**混乱と争い**が起るに違いないからです。

そこで神は、意を決して彼らをエデンの園から**追放**し、遠く離れた地で、土を耕して生き、土にもどっていく人間になさいました。そして、**命の木**に至る道を、ケルビム(天使の一種)と、きらめく剣の炎で閉鎖してしまわれたのでした。**エデンの園の閉鎖、楽園**がこの世界から**失われてしまった**のでした。

## [3] アダムとエバの悲劇

エデンの園を追放されたアダムとエバ夫婦は、その後どのような人生を送ったのでしょうか。彼らに長男**カイン**、続いて次男**アベル**が誕生します。カインは**土を耕す者**になりました。アベルは**羊飼**いになりました。カインは**土の実**りを、主のもとに捧げ物として持って来ました。アベルは羊の群れの中から**肥えた初子**を捧げました。

すると主は、アベルの捧げ物に目を留められたけれども、カインの捧げ物には目を留められませんでした。カインは**激しく怒って**、顔を伏せました。そしてアベルに言葉をかけて、誰も見ていない野原に連れ出して、**アベルを殺して**、土に埋めてしまいました。しかし主からその**犯行**を咎められたカインは、アベルの血をのみ込んだ土を耕しても、作物を産み出すことはないと言われ、**地上をさまよう者**になってしまいました。

カインは自分をさしおいて、神に受け容れられた弟に対して**激しい妬み**に駆られる前に、「**神さま、どうしてですか**」とその理由を尋ねるべきでした。何はさておき、**先ず神の御心**を聞こうとする**信仰**を、親から教えられていなかったからですね。アダムとエバは、善悪を知る木の実を食べて賢くなり、神に聞かず、**自分の判断**だけで行動しようとした結果、エデンの園での**楽園生活**を失ったばかりか、

息子を二人とも失ってしまったのです。しかも初めて産んだ息子が、殺人罪の犯人第一号となってしまったのです。「決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」という神の警告通りになってしまったのです。

### [結] 礼拝を守り続ける

私たちは4月から6月末まで3ヶ月、ローマの信徒への手紙を学びました。その12章1～2節で「この世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかを、わきまえるようになりなさい」と勧めています。

私たちは何故、礼拝を大事にするのでしょうか。つい自分第一になってしまう私の心を刷新して、変えていただく。そして神の御心に従って生きていくその原点に立つことが、私たちの礼拝なのだ、パウロは語っているのです。

では見えない神の心を私たちはどのようにして知るのでしょうか。主イエスはおっしゃいました。「私を見たものは、父を見たのである」(ヨハネ14:9)。神が人間の姿を持ち、この世に生きる私たちに御自身を現して下さった——それがイエス・キリストです。特に十字架の死と復活に於いて神を最もよくお現しになりました。

私たちの罪を、ご自分が全て引き受けて、十字架の死の裁きを受け、私たちを救って下さったのです。墓の中から復活されることによって、死を生に変える神を現わされました。パウロは言っています。「イエスを復活させた方の霊があなた方の内に宿っているなら、その霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてください」(ロマ8:11)。死を生に変える神の霊の働きが、私たちの内面の死を生に変えてくださるのです。

ですから私たちは、自分の体を神に喜ばれる聖なるいけにえとして神に献げて礼拝するのです。心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかを、わきまえるようになっていこうとするのです。

アダムとエバは、折角エデンの園という楽園で幸せに生きていたのに、何が神の御心に適う善いことなのかを聞くことの大切さをおろそかにしたために、楽園を失ったばかりか、二人の息子をも失う悲劇を味わう身になってしまいました。この教訓を心にしっかりと受けとめて、礼拝を大切にして、信仰の歩みを進めて参りましょう。

祈ります: 主なる神さま。今日もこのように兄弟姉妹と共に、あなたを礼拝する恵みに与ることが出来ていきますことを、心より感謝いたします。アダムとエバの悲劇を繰り返す者とならぬように、御言葉を聞きつつ、大切な人生の一步一步を歩いていく者にして下さい。共に生きる方々にも、御言葉に聞きつつ、自分の役割りを果たす者にして下さい。どのような命をも大切にして、仕える者にして下

さい。争う心に愛と平和を満たして下さい。救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン